



クオニカル



第 28号

2024年3月1日発行

一般社団法人

自立生活センター三田

通信・発行

生きていて想うこと

.....

人がありのままに生きる素晴らしさと意味。当事者運動の歴史と意味を知って、漠然としていた思いが何からきていたのかが分かってきた。

ピア・カウンセリングによって“障害”についての意識が変わっていくと、いつも健常者社会を基本にして頑張っていたことが、私を苦しめ縛っていた原因であったと気が付いたのである。

障害者イコール可哀そうと同情されて生きることに、前々から私は、強い反発心を覚えていた。

自分の生活は自分で決める。【自己選択・自己決定・自己責任】自立生活は当たり前生きる権利であり、自然の要求である。重い障害を持っているからというだけで、個人の人生を他者が決めて良いわけではない。例えばそれが、愛からであっても、慈悲からであっても・・・である。

世の中で“愛・優しさ”への考え違い、思い違いはないだろうか？

社会を構成する一人として、障害も必要な存在であることに変わりがない。健常者側から見た社会の考えた自立ではなく、障害を当たり前として、自らの人生感を持ち社会の一員としての自覚した生き方こそ自立生活である。障害を持つ人、持たない人の分け隔てのない社会の実現の為に両者の存在は必要である。地道に明日も明後日もコツコツと活動していきたいと思っている。

今の私がこうして在ることの意味を教えてくれた、先達に返すことはできないけれど、苦しみや、悲しみで人生を曇らせている人達に寄り添っていくことこそ、私の役割を果たせるのだと確信している。 (吉田)

2014年10月クオニカル第21号より引用



目次

☆吉田さんの紹介

☆病室の窓から、見える風景

☆意思のあるところに道は開ける

☆出来事、活動の紹介

☆スタッフの声

☆ご報告

☆編集後記



吉田さんの紹介

◎三田市で出生

- ・4歳の時に高熱が出て「若年性突発性関節炎」を発症
- ・身体障害者一種一級の認定が出る(12歳)
- ・大阪文学学校通信講座の受講開始(20歳)

小野十三郎氏はじめ文学者との出会いから新しい世界が広がる。

- ・右股関節に人工骨頭を埋め込む手術を受ける。

◎手術後の回復と自立生活を目指して大阪へ

- ・大阪府機能訓練センターに入所。(23歳)

◎尼崎にて、ひとり暮らしを始める。(24歳)

◎障害を持たない男性と結婚(25歳)

◎長女を出産(26歳)

- ・第一詩集「風景の忘れ物」白地社より出版する。(37歳)
- ・右股関節人工骨頭を入れ替える。(38歳)
- ・左股関節人工骨頭を入れる。(39歳)
- ・自動車免許取得(41歳)
- ・大阪文学学校で尊敬する詩人、長谷川龍生氏の講座を受ける。
- ・第二詩集「さみしい夜に一個の林檎を」思潮社より出版する。(49歳)

◎運転席から転落し、頸椎を損傷する。

- ・2年余りの入院生活の後、退院。
- ・これ以降、車椅子生活を余儀なくされることとなる。(51歳)
- ・ピア・カウンセリングや全国広域協会を知る。(52歳)

◎介助者との生活が本格的に始まる。

- ・全国自立生活センター協議会の運動に参加、現在に至る。
- ・自立生活センター三田を立ち上げる。
- ・自立生活センター三田のイベント「ピア・カウンセリングってなーに」1回目を開催する。
- ・障害者自立支援法反対の抗議デモのために、頻繁に上京する。
- ・S事業所から派遣されたヘルパーの入浴中の過失から左足大腿部骨折、右足膝下骨折という大きな事故が起きる。
- ・一般社団法人として自立生活センター三田を法人化。
- ・介護事業所 はんど&はんどを立ち上げ、現在に至る。

2013年頃のプロフィール引用

病室の窓から、見える風景

～よしだみちに起きた突然の事故～

出来事というものは、ある日予告も無く訪れるものです。

2007年11月7日、今までの生活が、大きく変わってしまう出来事が起こってしまった。S事業所のヘルパーの不注意と、介護という仕事を持つ重要な役割への認識の甘さか、今となっては起こるべき事故であったとも言える。

入浴中にヘルパーの足が滑り私は床に仰向けに落ちた。一瞬の声と共に目にしたものは、あまり見ることのない湯気の向こうの天井であった。左足大腿部、右足膝下骨折。後になって分かったことだが、どこにも打撲した痕がなく、ねじれた状態で空中で両足が折れていた。今も入院生活が続いている。

車椅子にも乗れないベッドの上での毎日。

ベッドからただぼんやりと病室の窓の外を見る日が多くなっている。

入院生活は普通時間をもてあまして暇だと思われがちなものだが、私にとっては毎日が、良きにつけ悪しきにつけ、余裕さえももてない時間が続いている。

軽い骨折ではなく、大事故であったことから起こる問題。それも、私からの不注意という点は全くない。100%の被害者でありながらも、十分な配慮がされていないということに大きな問題があった。重度障害者というだけで、こうした被害者・加害者間の問題さえもが当然受けられるべきものさえも脅かされている現実がある。

今まで私は生活の中で関わり合ってきた人に対して、もっと人としての信頼感があると信じていたことが社会一般には通じない。もっと計算高く、非情なものがあることを実感しないではおれなかった。これは私にとっての信頼ということへの理念を揺るがすほどの大きな問題であった。決してマイナス面や暗い面を持たないということは誰もありえない。ただ、それを人間であるがゆえにプラスに変えるという心が働くのではないだろうかと思う。

一番辛いときの一言が、どれだけ相手を勇気づけるかということ、また逆に、思いやることの大切さを今回ほど衝撃を受けながらも考えさせられたことはなかった。

何十年もの障害を持つこのこれまでの中で、今回ほど寝たきり状態が長く精神的に辛い思いをしたことはない。全て事故という事実よりも、その事故によって引き起こされた人間模様に深く傷ついたと言える。

人間という文字は「ジンカン」と読み、人と人との間という意味があると、あるとき知って、今も私の中では人間は人と人との間に成り立つものだと思っている。しかし今回の出来事によって人と人との間が決して信頼だけでは成り立たないことを新たに知る結果となってしまった。私にとっては恐らく、生きている限り消えることのない心の傷となって残るであろうと思っている。

今回の経験をどれだけ今後の生活に活かしていけるのか。あまりにも大きな事故によって見通しの立たない現実がある。こうした迷いと不安の中で、それでも私を支えてくれるのは、自立生活センター三田の活動とピア・カウンセリングを続けてきた年月であり、介助者たちのひたむきな願いが、必ず復帰できるという私の思いと重なって強くしている。

三田の地域の中では、毎日の生活を送るために色々な問題があった。障害者として自分自身に正直に、ありのままに人間らしく生きる。それらを真剣に感じ、考えることができたのは、不自由な生活があったからだと言える。どこかへ出かける、こんなこと一つにしても、普通は電車に乗るのは当たり前で、時間のことも駅員の対応も気にすることはないはず。ただ車椅子だといつも考えて行動しないと行かない。いつ、どこへ、何時から何時まで、何に乗って、またどの交通機関の駅のバリアフリー状態などなど数えると、きりが無いほど計画を立てないとどこへも行けない。

それでもハプニングは常に起こり、介助者とともに一喜一憂の連続だった。行きたいところに行くという当たり前のことを当たり前にするこの意味を感じている。

誰もが当たり前と感じて生活していることが、とても大きな意味があり、計り知れない喜びがあり、悲しみがあるものである。一つの角度から見ると、私は障害を持って生きること誇りと勇気を学んできた気がする。どんな方法であっても、この自立した生活を生きている限り、続けていこうと強く思う。

こんな中で 2007 年クロニクルの編集途中に起きた事故により、本来発行するはずの新年号を作成できませんでした。介助者スタッフからのメッセージを加えて 2008 年の春号とします。

(吉田)

2008 年 3 月第 11 号クロニクルより引用





意思のあるところに道は開ける(リンカーン)

今を見据えて生きる。澄んだ瞳。聡明な瞳。瞳には多様な言い方がある。

一点を見据えた瞳は何を語ろうとしているのか？

または、何を胸奥に、秘めているのだろうか？

今夏に見た『標的の村』ドキュメンタリー映画の中の少女の瞳が忘れられない。

圧倒的な力に怯まない、その瞳は清らかに澄み強烈に私を射った。

障害を持って自分らしく生きようとする、何かしらの力が押し寄せてくる。

では、その見えないものは何か？

当たり前のことと教えられてきたことが当たり前でなくなる時である。

“そんな生き方は私ではない”と考えるようになると、ぐっと抑えてくる力にぶちあたる。

その日から見るもの、会う人の目の違いに気づかされたりする。意思を持たないように見えていた一輪の花がことばを語り始めたりする。

自分で稼ぐことのできない障害者の生活を支えるために制度がある。

制度そのものは決して障害者を苦しめるものでも、生き辛くさせるために作られたものでもない。

しかし見えないところで、当事者たちを抜きにして進められている事柄が多い。

制度に込められている内容は、時代や政局によって移りかわり、ひたむきに生きようとしている障害者の前に立ちはだかり苦しめる力へと変貌をとげる。

多くの障害者が目覚め、声に出して戦わなければならない時、瞳はまばたきをしない……。

障害に向き合っている人々の思いを否定することは、誰にもできない。

見ようとしなければ見えないもの、意識していなければ見過ごしてしまうもの、気がつくや首の下まで押し寄せてくる力がある。

現在の社会は個人の思いは届かず歴史を力づくで変えようとしているかに見える。

今こそ曇らない、静かに燃える“いのち”の瞳を持ち続けよう！！

(よしだ)



2015年10月第22号クロニクルより引用



出来事、活動の紹介

2014. 8. キリンビール工場



2019.5.
関西学院大学にてスタッフ募集の呼びかけ

2020.10.
お庭の自家製レモン収穫



2020.11.
篠山へお出掛け



2020.12.
市民活動パネル展 展示



2021.2. 吉田さんお誕生日



2021.3. ヘルパー研修
調理実習
イチゴ大福の調理を
動画配信して研修しました！



2021.3. 近所の桜を見に

2021.7. 淡路島八日帰り旅行



2021.10. 神戸養蜂場 ランチ会 🎵

2021.11 播州清水寺 紅葉狩



2021.12. 長年勤めてくれた
入浴スタッフのお別れ会



2021.12. パスカルでお買い物



2022.1.
zoom と対面のハイブリットで研修会&新年ビンゴ大会！



2022.2. 吉田さんお誕生日



2022.3. 学生スタッフ 卒



2022.5. 美容院へ行ってきまーす



色とりどりのお花たち
いつも素敵な写真に撮影されています

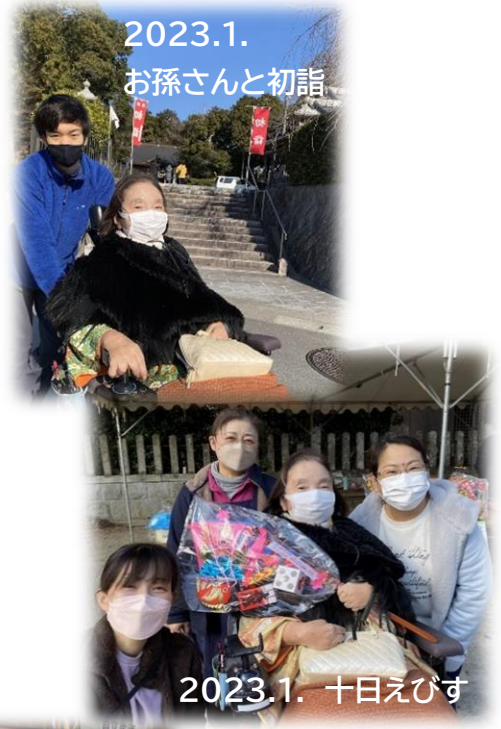


2022.6. 学生スタッフ 卒業





2022.8.
たこ焼きパーティ



2023.1.
お孫さんと初詣

2023.1. 十日えびす



2023.2.
新年ビンゴ大会!



2023.2. 吉田さんお誕生



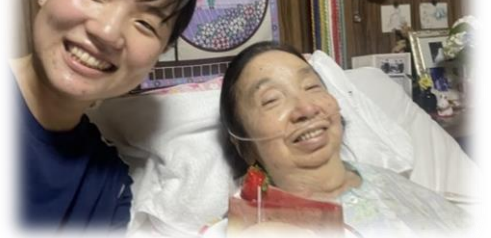
2023.4. 近所の桜を散策



2023.5. ヘルパー研修
「風は生きよという」鑑賞



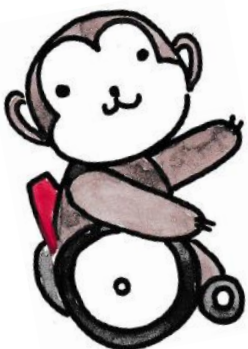
2023.7. 夜勤スタッフと
夜のひと時☆



2023.8.
スタッフお誕生日



2023.11. 有馬富士公園へ遠足



2023.12.
地域の防災訓練に
スタッフ参加



2024.1. ヘルパー研修
新年の親睦会も兼ねて



スタッフの声



私が自立生活センター三田に就職したのは 2017 年 11 月です。この頃の吉田様は、障害者が地域で自分らしく生きていく為にはどうすればよいかと、他の障害者の方と会合を持ったり、映画を上映したり、その為の資料作りをしたりと、活発に活動をされていました。しかしコロナ禍で外出が困難となり、体調不良も相まって徐々に活動も低下していきました。昨年肺高血圧症と診断をされてからは、何かにつけ「肺高血圧症が悪化している」と不安を口にされる様になりました。今年に入ってから「70 歳迄、生きられるとは思っていなかった。皆様のお陰だ。幸せな人生だった」と何度か話されました。吉田さんとのお別れは突然でした。

みち様お疲れさまでした、そしてありがとうございました

望むまま 眠りのままに 春逝きぬ

清水

四季の花を愛で、四季の味を楽しみ、いつも笑顔で過ごされていた吉田さんと出会えた事は私の宝物になりました。

多くの介助者をまとめることは大変だったと思いますが、一人一人の個性を引き出し、得意なことを見極める力はスゴイなと思っています。ですから介助者は楽しく集い、やりがいを持って仕事させていただけだと思います。

最期まで自宅で！！強い意志で望まれたとおり実行された吉田さんに感服いたします。吉田さんのように最期まで自宅で迎えることは可能なのだと示してくださいました。まだそれを支える社会やしくみが不十分だとは思いますが、お互いに大切な命を尊重し、支え合い、よりそうケアが整えばよいと思います。

福ちゃん

みちさんからは数え切れないほど、沢山の教えを頂きました。短時間しか職場にはいれず、わがママをいつも優しく受け入れて下さり笑顔で迎えて下さる素敵な職場でした。仕事上がりには、自然と自分から「ありがとうございました」と温かな気持ちで帰ってゆけました。同僚の皆さんたちが家族の様でかけがえない存在だったことが今になって懐かしく、もっと長く一緒にいたかったな、、、と思います。みちさんとの思い出は、日々のさりげない会話の中で沢山のアドバイスや人として自分らしく生きていくことの大切さを教えて頂きました。もっともっと教えて頂きたいことがやまほどありました。職場で働く皆のために自分の力を全部使い果たしてしまったのだと、今では感謝しかありません。干し柿の作り方を教えて頂いて、生まれて初めて自分で作れたときのことが、最後の思い出です。ありがとうございました。

M.Y

自立生活センター三田で優しい方々と一緒に楽しく働けたことが私にとって1番の思い出です。私が片付けなどが遅かった時や間違えた時も初めはみんなそうだよと励ましてくださいました。吉田さんや皆さんのその一言が私にとっては大きく、もっと頑張ろうと思えました。これからは自立生活センター三田で学んだことを活かして初心を忘れず人に優しい人になろうと思います。ありがとうございました。

A.K

吉田さんと初めて会ったのは、コロナが流行り始めた頃でしたね。

新聞折込みの求人を見ての応募でしたが、ひと目見た時、なぜか「あ・ここ・わたし・いける！」と感じました。

有能な先輩とかわいい学生さんのおかげで、緊張しながらも楽しいスタートを切ることができました。

吉田さんは食にこだわりを持ち、着物を着、花を愛でる、とても素直な人でした。

庭の花を大切に育てられ色とりどりに咲き、鳥も集まってきましたね。コロナ禍と言う時期でもあり、文字通り生活に彩りを添えてくれた花々に感謝です。

東風吹かばにほいおこせよ梅の花

あるじなきとて春な忘れそ

2年前に移植した貝母が今年は咲きそうです。楽しみです。

そこから安心して見ていてください。

吉田さん、ありがとう。

「吉田さんちの山口さん」でした。

自立生活センター三田での仕事は、週1回のお昼までの勤務からのスタートでした。

なじみのある家事から、初めての事もあり、慣れるのに必死でしたがなかなか思うようにいかない日々でした。吉田さんにはたくさん我慢してもらっていたと思いますが、いつも温かくフォローしてもらったおかげで続けることができたと思います。そして周りのスタッフ皆さんにもたくさん支えてもらい感謝しています。

特にこの1年弱は勤務も増えた分たくさん学ばせていただき、思い出もたくさんです！

あっつい甘酒も「うんっおいっ！」と飲まれていました

バターたっぷりトーストもお好きでした(我が家でも吉田家のチャーハン、トースト好評です！)

1月の美容院は帰りに風が冷たくて、「寒いですねー！」とひざ掛け飛ばされそうになりながら大急ぎで帰りました

お日様でしっかり乾いた洗濯やぬくぬくのお布団に私も満足感を感じました

日々の一つ一つが、自分好みにできる充実感はとても尊いんだと教わりました

吉田さん、本当にありがとうございました

小林

みちさんと2012年にお出会いして、この12年間の深いご縁に感謝いたします。

一緒にお出掛けした思い出が数知れず・・・三田、神戸周辺はもとより名古屋でのお泊り2泊 3 日楽しかったです。京都、大阪、西宮など何度も行きました。お決まりのランチや夕食よくご一緒しました。

Cil 総会、女性ネット、リングリング、メインストリームに映画館・・・映画は「最強のふたり」(障害者と介助者の実話)。玉木幸則さんの講演の中の一環として観せて頂き、みちさんと私のコンビも“最強のふたり”(笑)やね！と感じ合った大切な思い出です。

それから 2013 年冬宝塚の県民局へは、事業所を立ち上げるために何度も足を運ばれ、いつもご一緒しました。そしてその年の夏「はんど&はんど」を見事に立ち上げられました。

夜中もほとんど睡眠を取らず立ち上げのための書類作成に明け暮れておられました。夜勤帯に私も、たよりないながらお手伝いさせてもらいました。みちさんは身体を酷使して頑張り続けておられました。お身体大丈夫かなあといつも心配でしたがこちらの心配もよそにお変わりなくパワフルなみちさんでした。

上映会では、私が一番心に残っているのは 2013 年 3 月の「ここにおるんじゃけ」佐々木千津子さんの講演会でした。どんなに重い障害があってもいろんな事がしたいどこへだって飛んでいって見たり聞いたり学んだりしたい！と行動されていたみちさんと同じく佐々木さんの生き方にとても感動しました。講演会のあと、佐々木さんを夕食に招待され、私も同席させてもらいうれしかったです。

夕食が済み、三田駅ホームまで、広島まで帰られる佐々木さんを、みちさんと一緒にお見送りした事も一生忘れられない思い出となりました。その後も毎年のようにイベント、上映会を実行されておられました。そんな、みちさんの側に居て色んな学びや感動がありました。

「当事者決定」この思いを最後まで貫かれたみちさんの人生に敬意を表します。

クロニクルのロゴ絵、支え合う人と人の如く“人は支え合っているよ”“支え合うものよ”とこの広い空からみちさんのお声が聞こえてきそうです。ありがとうございました。

池田あゆみ



2015 年 春
大阪グランフロントにて
「風は生きよという」上映会

ご報告

吉田みちは2024年2月12日、自宅にて安らかに眠るように旅立ちました。故人の遺志により、葬儀は近親者のみで自宅にて執り行いました。生前お世話になりました皆さまへのご報告とお礼が遅れてしまいましたことを、心からお詫び申し上げます。

先達の方々のおかげで自立生活を始められてから20年、その間多くの介助者、個人、団体の皆さまに支えられてきました。吉田は、少しでも恩返しができればと、24時間介助が必要な身体であっても、自分らしく自宅で暮らせることを体現し、活動していくことで、後に続く方々の自立生活への道が少しでも開けることを願っていました。

意思を尊重し、寄り添い、支えてくださった介助者の皆さまのおかげで、好きな着物を着て、心温まる料理と笑顔に心身ともに栄養をもらい、お庭の草花を愛でながら、気持ち良い環境の中で毎日を過ごすことができました。障害だけでなく、難病も抱え、晩年は体調も不安定でしたが、在宅医療関係の方々とも密接に連携していただきながら、願い通り最期まで自宅で過ごすことができました。これは重度訪問介護の体制基盤の上、吉田の介助のスペシャリストとして、各々がその時々状態に合わせ対応してくださったおかげです。とても尊く感謝しています。

「みんなの期待に応えられないのが申し訳ない。みんなによくしてもらって本当に幸せだった。ありがとう。」と、最期まで寄り添ってくれた介助者のひとりひとりに感謝し、これからのことを案じていました。また仕事を辞めてからも、嬉しい連絡をくださった元介助者の皆さまのことも、我が子のようになり、幸せを願って応援していました。

吉田みちと繋がり、導き、ともに歩み、笑い、怒り、泣き、喜びを分かち合ってくださいました皆さまに深く感謝申し上げます。ご健康とご多幸、さらなるご活躍を心よりお祈りしています。

一般社団法人自立生活センター三田 代表理事 吉田みち 娘 友華

(編集後記)

5年余りの歳月を経て、第28号クロニクル発行となりました。「クロニクルを作れたらいいんだけど、、、」と時々吉田さんがおっしゃられていました。遅ればせながら何とか形にしたいと思い、皆様にご協力いただいたおかげで形にすることができました。吉田さん、お待たせしました。どんなことを書いて伝えなかったですか？

今回今までのクロニクルを読ませてもらい、いつもお話をしていたことがたくさん書かれていました。改めて思いの深さと強さを感じました。

また皆様との大切な時間がたくさんあふれていることを知りました。

人と人のつながりがいっぱいです！

クロニクルを読んでくださった方々、ご協力いただいた方々に心から感謝いたします。

(小林)

2024年 3月 1日発行

一般社団法人 自立生活センター三田

✉ cil_sanda@yahoo.co.jp

